
厨二病

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病

【Nコード】

N1546T

【作者名】

KMY

【あらすじ】

まるで厨二病みたいな（まんま厨二病な）ヒロインが活躍する、痛い話です。

ネイティブ厨二病（自称）である私が書いた、激痛小説です。

恋愛とファンタジーを足して2で割ったような内容です。

あちこちパロディがありますがお気になさらずに。。。

高校生の時に描きかけた漫画を小説にしてみました。

「お前、最近長瀬と何かあるたびに屋上に来てるよな」

「わ、悪い？」

少女は、顔を真っ赤にして青空を見上げる。さっきとは打って変わって、弱々しい声で少女は吐いた。

「長瀬君ってクールだし　自分のことははっきり言えるタイプだしさ」

ポケットを手で塞ぐ。中にいる小さい何かが、暴れ回りだした。

「私、背が低くっていつも本ばかり読んでるし、暗いって思われてるのかなあ」

「息！息！息ができない！」

叫び声に気づいて、少女、是永長読これながはよみは、ポケットからぱっと手を離す。

「ご、ごめん」

びよこつと、小さな顔が　顔というよりも、クマをデフォルメしたようなくりんとした目に黄色い滑らかな毛、丸い耳を頭の上に2つつけている　姿を現した。溺れて助けてもらったように、何回も何回もぶはーつと大きく呼吸をしている。

「　ねえ、ケロちゃん」

「二度とその名で呼ぶんじゃないと何回も言ってきたぞ！」

その黄色い妖精のやじが、是永の耳を劈つんぱく。

「下手したらさくらの二次創作だと疑われるだろ！疑われたらどうすんだよ！どう責任取るんだよ！笑い事じゃねえんだぞ、あ？俺にはヴィリニユスという名前があるんだぞ！」

是永は、目を細めて黄色い小動物を睨む。

「人が真剣に悩んでいるのに、その態度は何なのよ　。第一、ヨロツパの都市を名前に付けるなんて、典型的な厨二病じゃない。

しかもヴィって何、普通にビってできないの？　　はあ　　」
そう放って、再び真上の空を眺める。

「誰に言ってるんだよ　　」

ヴィリニユスはしらしらしい顔つきで是永の顎を睨み、不満を隠

さない。

雲が少しずつ、流れていく。

「土管が爆発したな。ドカーン、なんちゃって」

再びヴィリニユスが言ったが、是永の顔はびくりとも動かない。

ヴィリニユスは「そっか」「とつぶやいて、うつむく。

「あたし　ヴィリニユスと出会わなければよかった」

「俺もこんな仕事はしたくないさ」

ヴィリニユスは、ちらりと上を見る。是永が、歯を食いしばってヴィリニユスを見つめていた。頬は涙で赤く腫れ上がっている。

昼は暑くなつたが、夜はそうでもない。まだ寒い、これでも先月と比べて緩和された向きはある。

茶色のローブを身にまとい、右手にはピンク色の大きいダクトを握っている。首のすぐ下にあるローブの結び目の上に、左手を当てている。

強い風に煽られてふわっと浮き上がったローブに、視界が邪魔される。少しいらつとはしたが毎晩のこと、もう慣れている。

「屋根の上でこんな格好をしているあたり、厨二病だよね」

「だから誰に言っただよ」

ヴィリニユスと一通りやり取りを済ませた後、風とともに収まったローブに隠れていた部分に、是永はダクトの先を向ける。屋根の端につけている足元の真下、家の壁から塀まで3メートルしかない小さな庭を、是永は見下ろしていた。

植木もない土だけの庭の端っこにある赤い屋根の小さな犬小屋。その前に立っている、クワを持った長髪の少女。2階の窓から漏れる光が、ほのかにそれを照らしている。

「気配がするな」と、ヴィリニユス。

「最近、クロウカードって言わなくなつたね。自分もなりきっていただくせに」と、是永がぼそり。

「もう許してくれよ」

ヴィリニユスが返したその矢先、庭の少女がゆっくりと両手でクワを振り上げる。

「今だ！」

ヴィリニユスの合図とともに、是永はダクトを振り上げ、叫んだ。
アブソーブション

「吸収！」

ダクトの先に出たピンク色の玉がゴオツと大きくなり、突如速く回り出した。玉に向かってくる風がどんどん強く大きくなっているのを、是永は感じていた。

下にいる少女の頭がだんだん白っぽくなっているのが見えた。いや、白になっっているのではなく白いものが浮き上がってきている。

「オギャアアアアアア」

不気味な叫び声をあげて、白い半透明なもやに近いものは、だんだんとその形が少女の体から引き離されていく。

「吸うな、息を止める！」と、ヴィリニユス。

「分かってる！」是永は、半ば面倒くさそうに、叫ぶようにそう応じた。

「ギャアアアアアアア」

白いものはやがて、少女の頭から乖離した。その瞬間、少女が膝をついてうつ伏せに倒れたのが分かった。掴むものを失い、もやは一気にピンク色の玉に引きこまれた。

玉がバシンと弾け、辺りはまた暗くなった。

「はあ」

どすんと三角屋根のてっぺんに尻をついてため息混じりに声を出した是永は、また上の真っ黒な空を眺める。月はあるものの、すごく細い。三日月は、何日前だっけ。

ぼんやりとした表情の是永に、ロープの結び目にぶら下がったヴィリニユスが声をかける。

「さっさと次の場所、行こうぜ　おい？長読？　まだ忘れられないのか」

「うん」

是永は、こくと頷いた。ヴィリニユスは、はあつと下に大きな息を吐いた。

「あのな　俺達の使命は何だったかな？生き物を殺したり傷つけた後に生まれる独特の負のエネルギーを集めようとする集団がいてな、悪鬼を取り憑かせてまでそれを産み出そうとするから、それを阻止するはずだったんだろ？現にさつき一匹の悪鬼を仕留めたんだろ？」

「まだ思春期じゃない小学生のうちに来てくるなんて、悪質だね妖精として」

目からぼろりとあふれた是永の涙は、彼女の顔が真上を向いているため首のすぐ下にいるヴィリニユスには見えない。

「そういうずる賢さって、もっと他のことに生かせないのかなあ。せめて中学生になったら任務解除とか」

黄色い小動物は、何か言おうとして口をつくんだ。是永の頬から滴り落ちた涙が、ぼんと頭にぶつかって落ちた。軽いけど重い涙。「いくら、その一味が人間のふりをして身近にいるかもしれないからって　さ」

彼女は、腫れ上がった顔で、笑っていた。明日か明後日には見えなくなるであろう月に、最大限の笑顔を贈った。

「一生恋愛禁止なんて　さすがにきついよね」

犬小屋のある庭の塀の外に、電柱にもたれかかっている人影があった。

さつき、不意に聞こえてきたあの声で、まさかと思った。

でも、やはり間違いない　あの少女は、紛れもなく。

憎悪は、失望を生むのか　。腕を組んだ。

薄緑のバーガーに身を包んで、その少年　長瀬学は、ふと上を見上げた。電柱の真つ白な光が眩しい。

その向こうにある空。何で黒いんだろう。何でどす黒いんだろう。星なんて見えない。

「よじらぬって

あの子が”悪鬼狩り”とは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1546t/>

厨二病

2011年5月9日23時12分発行